

平成 28 年度 第 2 回 ゼニガタアザラシ科学委員会 議事概要

平成28年12月5日(月)
札幌市環境プラザ内 環境研修室

■ えりもでのサケの不漁について(桜井委員より情報提供)

- ・ サケは北日本から川を下って一旦オホーツク海に入り、ベーリング海を経て4～5年で戻ってくるが、幼魚期を過ごす沿岸やオホーツク海的环境条件によって回帰率が変化する。
- ・ 2011～14年は冬季及び春季(サケ稚魚の降海期)の沿岸水温が低く、稚魚の生き残りに影響を与えたと考えられる。また、北洋海域の餌も少なかった可能性が高い。さらに、台風の影響などで秋季の沿岸水温が高かったことが重なり、来遊率が悪かったと考えられる。
- ・ 2014年の春も水温が低かったために、来年度もサケの不漁が心配される。

議事①これまでの捕獲結果について

- ・ タイマー式幕網のプランを作り、実際に運用してもらったが、全10回中5回で動作不良があり、改良案を検討中。タイマーを動作させる時刻等も検討が必要である。
- ・ アザラシが網に入っているのに獲れないのか、そもそも網に入っていないのか確認できればよい。
- ・ 春季に撮影された水中カメラの映像を元にサケの入網とアザラシの入網との関係を分析したところ、サケが入ってこないとアザラシもあまり入ってこない傾向が見られている。
- ・ 幕網の横の部分の部分をレールのようなもので落ちるようにしたら、アザラシが逃げる事が出来なくなり、捕獲できる可能性が高くなると思う。
- ・ 刺し網による捕獲では、大きな個体は脅かしてパニックを起こさせるというようなことがなければ網にかからなかった。
- ・ 刺し網に使用する網については、素材や網目、太さ、枚数など多様なタイプの網を試した。漁業者の方々とも意見交換しながら、二重網等の工夫も含め、今後はより強くて絡まりやすい網で実施できると思う。
- ・ はこ罟の設置には小さな船を使うため、波が穏やかな条件でなければ実施出来ない。今シーズンは天候が悪い日が多かったため、岩礁への設置はまだできていないが、準備はしており今年度内にも条件が整えば実施する予定。
- ・ 日本動物園水族館協会の協力のもと、今年は10個体の生体捕獲個体の譲渡があった。譲渡を受け入れてもいいという水族館等があれば引き続き譲渡できるよう取組んでいきたい。
- ・ ゼニガタアザラシの譲渡先である水族館等においてえりも地域が抱える問題や共生に向けた取組み等について、展示や解説してもらえれば、普及啓発につながると考えられる。
- ・ 捕獲目標に対して実績がどうだったのか、今後議論できるようデータを出してほしい。
- ・ 次回の科学委員会で来年度の捕獲上限頭数を議論する予定であるが、北門委員には、新たな知見を入れた個体群シミュレーションをお願いしているところである。
- ・ 参考資料を見るとゴマフアザラシの銃器による捕獲数が多い印象があるが、ゴマフアザラシだから銃

器で捕獲ができるのか、ゼニガタアザラシにも応用ができるのか。

- ・ 礼文町におけるゴマフアザラシの捕獲数が多いのは船上からではなく、陸上から撃っているためだと考えられる。また、銃を撃ってもアザラシが上陸するような岩礁があれば、効率よく捕獲ができる。えりものゼニガタアザラシについてはどのような状況になるかわからない。
- ・ 銃器による捕獲については、アザラシが学習して逃げ足が速くなり、効率が下がっていくので、慎重に行う必要がある。
- ・ 今年度中に捕獲としての銃猟は考えていない。
- ・ 生きたまま捕獲された個体は、獣医師の立会いのもと麻酔によって安楽殺を行った。

議事②秋季におけるサケ被害状況及び防除試験の結果について

- ・ 格子網は、漁業者の判断で被害の状況によって装着したり、しなかったりしている。今後も場所や漁獲状況等により、装着したり外したりというような形になるだろうと思っている。
- ・ 刺し網による捕獲を実施するときに忌避装置を使って脅かすというやり方も検討してはどうか。
- ・ 外洋での忌避装置の効果はまだ試しておらず、電池寿命や技術的な問題等があるが、短い距離でアザラシを散らすのには効果があるかと思っている。
- ・ 胃内容物にサケが含まれている個体は、ほとんどがサケを丸ごと食べているが、それらは漁業被害として現れない。現在、被害量として数えているのはアザラシが食い散らして網に残っているサケだけだが、何を被害としてみなすのかは重要な問題である。
- ・ これまで100頭程度の個体に超音波発信機を付けて、定置網周辺における行動を調査した。現在、調査結果を分析しているところだが、水中カメラの映像で個体識別ができれば、定置網に執着している個体数等がより明確になってくるかと思う。
- ・ 水中カメラで撮影された個体の識別手法としては、今のところ背部、腹部及び体側の左右4箇所の特徴を確認し、3箇所以上で一致したものを同一個体という形で識別している。
- ・ 春季の2週間の映像を用いた個体識別により、のべ50個体程度が識別されたが、判別できなかった個体を含めると、さらに10～20個体程度が来遊していると考えられる。そのうち定置網に非常に執着している個体が何個体かいることが確認された。
- ・ 一度毛皮に付くとほとんど取れない酸化鉄を格子網に付けておくと、何回も入ろうとする個体は擦れて中に入っていくので色が付くのではないか。それができれば定置網に執着している個体の識別ができ、銃の捕獲を行う場合にも効果的であると考えている。
- ・ 格子網を装着することにより被害が軽減できることは、ほぼ実証されたと考えて良いが、えりも地区全体の20ヶ統における防除の実施状況と、可能であれば個別の網ごとの被害量等のデータを蓄積することで、対策の効果検証につなげていく必要がある。併せて防除網の普及率を高めていくことが必要。
- ・ 上陸個体数調査結果は速報値であるため、今後変更の可能性はあるが、傾向としてはやはり沖の岩礁ほど見落とし率が高いようである。

議事③その他

- 今後のスケジュールとしては第3回科学委員会を2月中旬頃に、その後協議会を3月上旬に開催したいと考えている。
- 三菱財団から3年間の助成を受けて現地での対話集会等を行ってきた「ゼニガタアザラシ問題プロジェクトチーム」の活動の最終報告会として、北大の獣医学部の講堂で一般市民を対象にした公開シンポジウムを2月18日に開催する予定。都合がつけば参加いただきたい。

以上